

マンションコミュニティ研究会第3回フォーラム

震災からハグくむ新しい「絆」

～震災を「知り」、震災から「学び」、震災で「つながる」～



マンションコミュニティ研究会

2011年6月23日

マンションコミュニティ研究会第3回フォーラム

震災からハグくむ新しい「絆」

～震災を「知り」、震災から「学び」、震災で「つながる」～

6月23日18:30～ 月島区民館

< 次 第 >

●開会18:30

●趣旨説明

●現場からの報告18:40

1. 浦安市で起こったこと

マンションコミュニティ研究会代表 廣田 信子

2. 仙台のマンションの被害状況と課題

宮城県マンション管理士会会長 萩原 孝次

3. マンションでの助け合い

東北マンション管理組合連合会理事 紺野 智博

4. 復興への道 ～つながる～

東北まちづくりOMメンバー 藪内 しずか

< 休 憩 >20:00

●パネルディスカッション（報告者による）20:10

震災からハグくむ新しい「絆」

●「未来へ繋がる絆」（映像）20:50

●閉会21:00

第3回フォーラム

震災からハグくむ新しい「絆」

～震災を「知り」、震災から「学び」、震災で「つながる」～

開催に寄せて

マンションコミュニティ研究会は、マンションに暮らすということが、個人のライフスタイルが大切にされながら、いざというときは一人ではないという「安心」を感じられるス・テ・キな住まい方なのだと、マンションに暮らす方に再確認してもらいたいと活動してきました。

「孤独死を防ぐ」「大災害時の助け合い」は、どんなコミュニティにも不可欠です。マンションでも隣近所の関係を見直し、普段はゆるくても、いざというときは助け合える関係を育むことが必要です。そのために、まずは、年に一度のお正月、近隣にも意識を向けて、「年賀状」を送ってみようという運動に取り組みました。できる人から、小さなことでも行動することで、人の意識のバリアーを外していこうという試みです。

この「切手のいらない年賀状運動」には、このお正月1万人の方にご参加頂きました。社会的に大きく取り上げられた「孤独死」「無縁社会」という現状が、運動の後押しをしてくれました。参加した方からも温かいメッセージがたくさん寄せられました。

それを糧に、今年も活動を…と思っていた矢先、3月11日を迎えました。あまりの甚大な被害を目にし、その圧倒的な現実の前に、何ができるのかとしばし呆然としました。しかし、人と人との「絆」を大切に自らが立ち上がっている被災地の皆さんの姿にエネルギーをもらい、私たちもできることをやっていきたいと活動を再開しました。

私自身が被災し、防災についてそれなりに知識があるつもりが、いかに本当の被災に対する想像力が不足していたかを思い知りました。まず震災の姿をきちんと知ることが第一歩だと考え、東北仙台市かた報告をして頂く機会を得ました。

この震災で何か大きな変化が起こっていると感じます。私たちの中で眠っていた「自分は人とつながることで生かされている」という思いを多くの人を感じ始めています。被災地では、人と人とのつながりが急速に育っています。

人と人との「つながろう」という芽が生まれつつあるこの時期に、私たちは被災地から多くのことを学ぶと共に、自分たちにできることを考えたいとの趣旨で、フォーラムを企画しました。どんな小さなことでも行動することが「つながる」力となると信じ、このフォーラムでのたくさんの出会いに感謝して…。

代表 廣田 信子

●現場からの報告 1

浦安市で起こったこと

マンションコミュニティ研究会代表

廣田 信子



2011/06/23

マンションコミュニティ研究会第3回フォーラム

3・11東日本大震災

体験で語る 浦安市で起こったこと

マンションコミュニティ研究会
代表 廣田 信子

●平成23年3月11日(金)14時46分18秒 大地震発生!!!

- ・ 携帯電話使用不能→家族と連絡がとれない
- ・ 交通機関ストップ→帰宅難民
- ・ 役員不在のマンション
- ・ 被害状況がわからない

翌朝、新浦安にたどり着くと・・・

- ・ 液状化と地盤沈下で街は様相を変えていた
- ・ 駅前スーパーマーケットを取り囲む長蛇の列

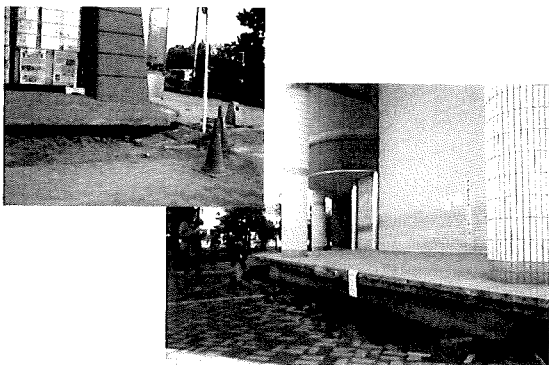
マンションに帰り着くと・・・

- ・ 駐車場でドロに埋まって動けない車両
- ・ ガタガタの敷地、建物と地盤面の段差
- ・ 傾く付属施設
- ・ 給水ストップ
- ・ 電気・エレベーターは復旧
- ・ 泊まり込みで管理員さんがマンションを守っていた

新浦安駅前のエレベーター



建物と道路の段差



段差ができた入り口の緊急補修



地盤沈下した敷地



エントランスの階段



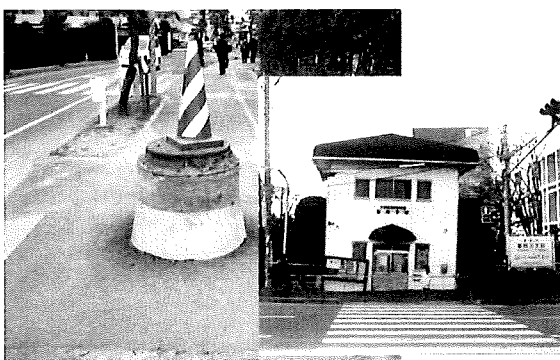
給水を待つ長蛇の列と道路に吹き出した砂の山



地割れと陥没のダブルパンチ



液状化で浮き上がったマンホールと傾いた交番



翌日午後、ようやく理事長、自治会長が揃い緊急招集

- ・ 理事会、自治会協働の緊急対策本部を立ち上げる
- ・ 各戸を周り、給水バルブを閉める
- ・ 水の供給
 - * 緊急遮断弁で確保した受水層からの給水開始
 - * 避難所に指定された小学校に給水車
→水を求めて長蛇の列(4時間待ち)
- ・ 居住者全員でデロの撤去作業

10日間の被災生活が始まる

- 排水管がドロで詰まっていることが判明、土曜日夕方から排水全面禁止
- トイレも使えない、手も洗えない10日間の被災生活が始まった
- 計画停電は容赦なく、危険な敷地が真っ暗に
→ 本当の被災の疑似体験

浦安市の被害状況

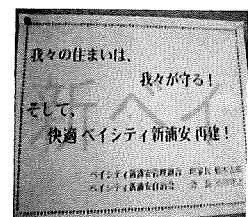
- 市全域の約85%が液状化被害
- 被災世帯3万7千世帯(全世帯の50.7%)
- 下水道破損地区 約820ha
- 道路の被害延長 111.8km
- ガス供給停止世帯8,600戸(全復旧3月30日)
- 断水世帯33,000戸(全復旧4月6日)
- 下水道使用制限世帯11,908戸(全復旧4月15日)

その後の行政の対応状況

- 当初、建物本体にはほとんど損傷がないことから被害認定されなかった。
→ 市民の要望(管理組合連合会も要望書提出)
→ 市の国への要請
- 2ヶ月半たって、液状化被害を受けた市内ほとんどのマンションが、大規模半壊、半壊、一部損壊と認定され、罹災証明が発行された
- 液状化のライフライン被害のマンションにも、上限3000万円(復旧費用の1/3)の助成(市単独)

自分たちのマンションは自分たちで守る

- キャッチフレーズのもと、共同作業にも多くの居住者が参加
- 理事会、自治会、住民有志、子ども、サークル、管理員一体で復旧を目指す
- 住民説明会には、2日前広報という急にもかかわらず、全戸の8割の人数が参加
- コミュニティ形成・防災体制づくりが急速に進む



被災体験から学んだこと

1. ハザードマップや防災マニュアルを過信しない
2. 管理組合には、管理組合にしかできない重要な仕事がある
3. 正確で情報の収集、伝達が極めて重要
→ 行政・地域との日頃の付き合い、ブログ、メーリングリストが役立つ
4. 自助(各自の備え)と近隣共助が力を発揮
5. 各自が考え、臨機応変に動くことが重要
6. 人材、ネットワークを活かすことが大きな力に
7. 行政の防災体制の中にマンションが組み込まれていない

震災に備えた「つながり」づくりを！

- いざというとき頼りになるのは隣人
→ 近隣コミュニティを見直す
→ さりげなく気配りや情報を伝え合える関係づくりの仕掛け(フロアー会、回覧板、あいさつカード等)を
- 管理組合の事業(総会、防災訓練、防災ワークショップ、建物点検等)を活用した人と人との「つながり」づくりを
- 様々な違いも包み込み、マンションの外(行政、地域、他マンション等)との「つながり」づくりを

東日本大震災では、地盤の液状化現象が予想以上の規模で起きた。被災地は震源から遠く離れた東京湾沿岸にも広がった。阪神大震災の約4倍以上の長い揺れが深刻な被害につながった。液状化の仕組みは分かっていたが、対策にはコスト面などで限界も浮き彫りになっている。

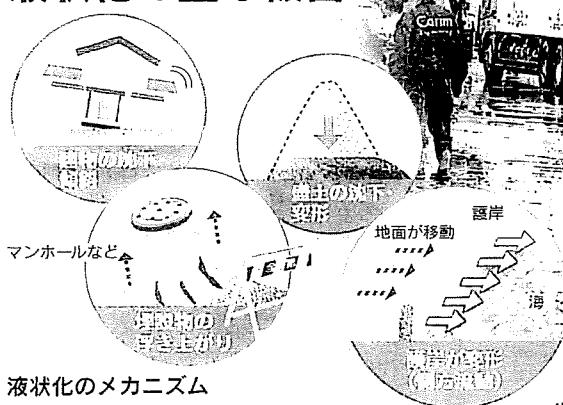
巨大地震 ④

茨城、千葉の両県や東京など各地が液状化した。東京電機大学の安田進教授などの推計では、東京湾沿岸で液状化が確認された面積は42平方キロ。世界でも最悪の規模となった。千葉県浦安市だけで14・5平方キロが砂だらけになり、その範囲は山手線の内側の敷地の約5分の1に当たる。1987年、千葉県東方沖地震が千葉県各地で液状化を引き起こした。その時と震度に大差はなかったが「今回は被害の程度や噴き出した砂の範囲はかなり大規模」（千葉県環境研究センター）。

液状化 揺れ長く被害拡大

「揺れが長い」と指摘する。揺れが長いと砂粒の隙間に

液状化の主な被害

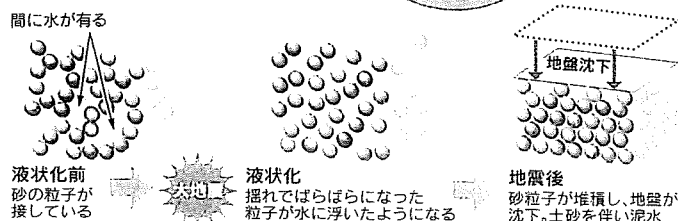


液状化した道路（3月11日午後、東京都江東区）

建物の液状化への対策

- 液状化を防ぐ
 - ・薬品などで固める（サンドコンパクションパイル工法など）
 - ・水を抜けやすくする（グラベルドレーン工法）
- 液状化しても建物の被害を防ぐ
 - ・基礎を強化
 - ・杭を太くする、多くする
- 液状化後の修理
 - ・ジャッキアップで建物の傾きを直す修理

液状化のメカニズム



グラフィックス デザイン部 吐田エマ

戸建て、予防策乏しく

水圧が上がり続け、水が噴き出しやすくなる。阪神大震災は強い揺れが10〜20秒続いた。今回は阪神の直下型地震とは違いますが、50〜80秒続いた。マグニチュード（M）9と、かたがた規模が大きい。同じ海溝型と比べても長く揺れたとみられる。地盤中の水圧が高まり、液状化を促した可能性がある。揺れが収まると地盤が沈む。土砂を伴った泥水が地表に出る「噴砂」もある。ビルなどは沈下。軽いマン

ホールは浮き上がる。地面が水平に移動する現象「側方流動」で、護岸が崩れることもある。有効な対策はあるのか。東京大学の東畑郁生教授は「今回の震災でもほとんど被害が出なかった地域があった」と話す。液状化対策は3段階あるという。まず地盤を薬品などで改良して発生を防ぐ。また東畑教授によると、千葉県浦安市では大型機械で締め固める「サンドコンパクションパイル工法」や、地震の際に水を抜けやすくする「グラベルドレーン工法」の効果が確認できた。同工法は直径約50センチ、深さ最大20メートルの穴に砕石を詰め、水を逃がす。第2段階は液状化が起きても建物の被害を抑える。基礎をしっかりと固め、杭（くい）を増やしたり太くしたりする。水道管は無理でも家屋は守る。最後は液状化で傾いた家屋をジャッキアップで直す。とはいえない設備を使う方法は商用施設や大規模な分譲地など向け。薬品を使う方法は1軒で500万円以上かかる。「戸建て住宅

の対策で決定打はない」（東畑教授）のが実情だ。ただ液状化しやすい地域が分かって、被害を食い止める一助にはなる。京都大学の田村修次准教授は「液状化の可能性は推定できる」と語る。掘削して地盤の固さにかかわる指標「N値」を調べる。これに想定地震の加速度や規模などを参考に計算する。自治体によってはハザードマップ（被災予測地図）を作っている。被害の大きかった浦安市は危険性が高かった。川や海の埋め立て地は液状化しやすい。400〜500年前から被害がなければ今後とも起きにくい。一方で宮城県では過去の地震で液状化が4度繰り返した痕跡も見つかっている。

長い揺れにどう備えるか。未曽有の大震災は津波だけでなく液状化対策にも見直しを迫る。安価な対策が乏しく、膨大なコストがかかる数百年に一度の大地震まで考慮すべきか、専門家でも意見が分かれる。自治体などはリスク低減とコスト負担の間でバランス感覚が問われている。

北海道から九州まで全国で液状化の発生記録がある。1993年の釧路沖地震では釧路市の港湾部が大きな被害を受け、95年の阪神大震災では沿岸部の道路が一部壊れた。2004年の新潟県中越地震では下水管が隆起するなどした。阪神大震災では側方流動が注目された。水平方向に地盤が数メートル大きく動く現象だ。護岸や建築物の基礎を壊す。東日本大震災では詳細な調査がまだ足りない。東京電機大学の安田進教授は「護岸や建物の杭（くい）は、今回のように長く小さい加速度の揺れよりも、阪神大震災のように短い加速度の大きい方が被害が出やすいだろう。今後詳しい調査が必要だ」と話す。

液状化 日本全国で発生記録

住民からは評価の声

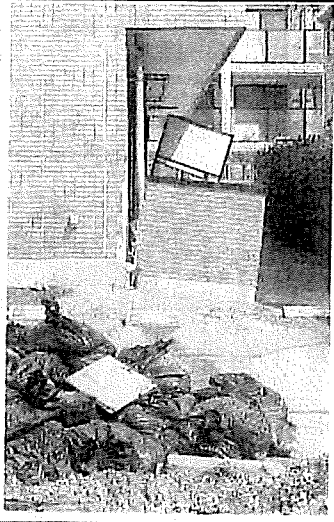
関係市長 認定基準緩和を要望へ

液状化被害に支援金方針

政府が東日本大震災で住宅が液状化による被害を受けた被災者に住宅再建を援助する支援金を支給する方針を固めたことを受け、液状化被害の大きかった浦安、香取市の住民から一支援は助かる」と評価する声が上がった。26日に千葉市内で開かれた県市長会では、関係自治体の市長ができるだけ多くの住宅が救済されるよう、被害認定の基準緩和を政府に働きかける方針を確認した。

被災者生活再建支援法で「液状化現象による住宅被害は、自然災害による住宅被害も支援金支給の対象に加え、全壊家屋など」の方針を固め、月内にも正に基礎支援金と新たな住宅方式決定する。

の再建資金(加算支援金) として、計300万円を上 取、習志野、我孫子の5市 限に支給するとしている。 政府は今回の震災を受け、を中心 計約1万2000



液状化でヘランタ部がひび割れた住宅。浦安市で3月25日撮影。

戸の住宅の大半は、現行の「被害認定基準運用指針」で、支援金の対象となる全壊「大規模半壊」などには該当しない見込みだ。垂直に垂らした長さ120センチのひもと傾いた建物の壁に生じたずれが6センチ以上なら「全壊」、2センチ以上6センチ未満なら、支援金の対象とならない「一部損壊」と判定される。例えば、浦安市では、液状化被害を受けた住宅の大部分を占める約8000棟が、一部損壊に当たらず、修繕の支援を受けられない事態となる。

このため、関係する市長は26日、現行の運用基準が液状化被害を想定していないとして、見直しを求める要望書を一両日中に防災担当相と国土交通相に提出することを決めた。

浦安市の松崎秀樹市長は「液状化被害を受けた住宅に支援してもらえないようになり、家屋の傾きだけでなく地盤沈下も含め、さまざまな被害を受けた住宅が、早く支援をお願いしたい」と期待を示した。

香取市佐原の八木清昭さん(56)が経営するそば店の自宅兼店舗は、液状化で床上まで泥土が噴き出し、建物全体に傾きが出た。約1か月間休業後、営業を再開したが、建物の修繕、再建には手をつけられずにいた。政府の方針に「いくら何でも国が面倒をみてくれるならありがたい」と歓迎。

自宅が傾いた浦安市舞浜の70歳代男性も、「支援金が出ることはありがたい」と語った。しかし、傾いた自宅を元に戻す費用など、今後も様々な負担が見込まれ、「負担が大きいことに変わりはない」と訴えている。

震災関連情報

千葉

◆旧銚子西高校に福島県からの避難者

銚子市が避難者受け入れのために改修した旧市立銚子西高校に福島県からの避難者4人の入居が26日、決まった。

同市によると、福島県いわき市、白河市の30代2人、

東日本大震災の発生から3カ月余り。世界でも最大規模とされる液状化現象による住宅被害は国や自治体に新たな救済策を迫った。部品産業のサプライチェーン（供給網）の寸断や混乱を教訓に経営改善を目指す中小企業。新たな震災ボランティア活動も芽吹く。首都圏各地の動きを追った。

法の対象外7割

6月6日。茨城県潮来市や千葉県香取市など7

液状化被害、救済に格差

久高市 (約160) ⊕

我孫子市 (約200) ⊕

潮来市 (約2,100) ⊕

神栖市 (約1,200) ⊕

東京都葛飾・江戸川・江東区 (計約30)

習志野市 (約4,200) ⊕

香取市 (約1,600) ⊕

千葉市 (約1,200) ⊕

横浜市 (約40) ⊕

浦安市 (約9,000) ⊕

自治体独自策、財政力の壁

けられる地域の格差が出ている。

一方、国土交通省は新たな液状化対策に乗り出した。土木や建築、地盤工学の専門家が宅地などの被害想定をはき出す数式を策定。液状化被害の予想図の見直しなど、自治体の防災対策に役立ててもらう。

今回の震災では土砂噴

液状化被害の復旧工事が始まっている
浦安市の住宅街



ガス管の入替
を行っていきます

平成23年0月20日3次
時間帯 9:00~17:00

め、地中の水圧がマンホール内に逃げるように、マンホールの側面に直径10センチほどの穴を複数開けることを計画している。

液状化は1964年の新潟県でクローズアップされたが、対策は見過ぎされがちな問題だった。被災者への支援とともに重要なのは、今日の震災で液状化の被害などだけでなく抑えることができるかだ。

●現場からの報告 2

仙台でのマンションの被害状況と課題

宮城県マンション管理士会会長

萩原 孝次

仙台のマンションの被害状況と課題

マンションの被災とは何か？

震災から何を学ぶのか？

宮城県マンション管理士会 会長萩原孝次

建築物の被害判定

応急危険度判定(市町村 直接の危険性)
危険 要注意 調査済み

被災度区分判定(日本建築防災協会)
復旧不可能 要復旧 復旧不要

被災区分(建築学会)
大破 中破 小破 軽微 無被害

罹災証明(市町村 一応、災害の被害認定基準 内閣府)
全壊 大規模半壊 半壊 一部壊壊

損害保険(損害保険会社 柱と梁)
全壊 半壊 一部壊 無責

※マンションに対応した新たな被害判定方法・基準の必要性
住宅としての安全と安心 住宅としての機能 資産価値
修理の技術的問題 修理期間 修理費用の負担

被害の実態

- 1、構造・躯体・・・大きな損傷なし(?)
- 2、非耐力壁?の損傷が著しい
- 3、設備損壊と地盤変状

- 4、旧耐震建物との比較
- 5、近隣戸建て住宅との比較

※、今回の地震波の特性(短周期)による
あくまでも
⇒ マンションは怖くて住めない
⇒ 資産価値が無くなった
⇒ マンションは地震に弱い

※集住の破壊→避難者続出

マンションの被害とは何か？

■マンション関係者? = 「隣壁だから・・・」
VS
■区分所有者と居住者 = 「怖くて住めない」
「資産価値が無くなった」「マンションは地震に弱い」

※視点 = 管理組合、区分所有者、居住者の視点
※マンションは構造物か住宅か

▼安全・安心で快適な都市住宅としての性能
▼諸設備があつてのマンション
▼修理費用
▼修理方法

⇒安全・安心 快適な住宅 防災環境設計

■人的被害・・・今回は不幸中の幸い
■集住の破壊・・・避難者続出 ばらばらになる
被害程度の差 感覚や意見の違い 復旧・復興の妨げ

ハード面の考え方

※誰の目から見るか！

分譲、設計、施工における問題

防災環境設計のコンセプト

売りやすさに流されない
非耐力壁の新工法 設備の新工法
地盤の考え方

ソフト面の考え方

区分所有法・被災特措法

- 損傷と滅失 判定と手続き 修補か復旧か
- 全部滅失とは？
- 建て替え・再建、復旧を選択しない(できない)マンション
老朽化、高齢化、資金難、市場性、信頼喪失

※建て替え・再建、復旧とは異なる選択肢への対応

支援制度

- 応急修理52万円 加算支援金(補修)100万円 税控除 その他
厚生労働省6月3日回答???

※いつまでたつても「継子」扱い

地震保険の摩訶不思議 制度 販売 判定 管理会社

災害で分かったこと

- 「想定外」の克服
- 「公助」「避難所」…あてにしない
- できることは限られる 時間が無い ストレス 知恵と工夫
- 日頃の備えが大切 体力次第 備蓄とコミュニティ
注:「備蓄」に頼らない
- 情報の途絶 携帯等モバイルは全滅 ラジオ局も停止
- 情報の偏差 受と発
- 自主避難所(在宅被災者)と指定避難所
- 「火事場泥棒??」
- 高齢者と高校生
- 絆…管理組合 ご近所 遠方からも

復旧・復興の課題

※復旧・復興とは何か?
元に戻す ドサクサ紛れ 教訓から学ぶ

- 1、被害を正確に把握する
- 2、補修・復旧に取り組む
設計仕様(技術的工夫) 見積もり
- 3、合意形成 健全なリーダーシップ 強いリーダーシップの功罪
- 4、資金の確保 保険、支援制度をフル活用
- 5、相談、支援の利用 マンション管理士の活用
- 6、建物・設備もコミュニティも復旧・復興

震災の教訓

- ☐ マンションは住宅ですよ
- ☐ 「まま子扱い」は、もうやめて
- ☐ マンション暮らし大好き

♥マンションの信頼の回復、復旧への希望
条件(資金)、技術、合意形成と決議

♥安全・安心な都市住宅＝防災環境設計
＝防災専任チーム

♥管理組合とコミュニティ 復旧・復興の明暗 体力次第

♥日頃から、体力増進に努める

♥さまざまな支援のシステムづくり

♥マンション管理士の活用

震災に備え、震災に負けない、震災を克服するマンション管理

●現場からの報告 3

マンションでの助け合い

*レジメは別冊になっています。

東北マンション管理組合連合会理事

紺野 智博

つながる

震災後 ③

仙台市のJR長町駅近く、115階建ての3棟からなる「長町街苑パークマンション」(229戸)は3月11日、大きな揺れに見舞われた。管理組合理事長の大竹公一郎さん(60)が夕方、仕事を早めに切り上げて帰宅すると、玄関ロビーと集会室に住民が集まっていた。避難所がいっぱいで、マンション内にとどまらざるを得なかったのだ。

一帯は停電しガスの供給もストップ。敷地内の受水槽が壊れて給水も止まり、各家庭で食事の用意ができない状態だった。大竹さんは妻の助言を受け、住民に共同で炊き出しをすることを提案した。

1階の玄関前に、低層階の住民からカセットコンロや鍋、米などが続々と集まる。女性らが自ら申し出て、約300人分のおにぎりや汁物を作った。

マンションで助け合い

翌日、管理組合と自治会の役員らを集めて協議し、住民からボランティアを募った。約50人の住民が手を挙げてくれた。停電でエレベーターが動かない中、高齢者のために日用品の買い出しに行ったり、高層階で倒れた家具を起こしたりする作業をした。

近隣のスーパーや銭湯などの開店情報を住民が集め、玄関ロビーの掲示板などに貼り出した。炊き出しは約10日間続いた。

「管理組合の運営に関心のあまりなかった人も協力してくれた」と大竹さん。

住民の仲間意識強まる

「今ではあいさつだけでなく、立ち止まって会話するのが当たり前になった」

一人暮らしの住民の間で、手料理を持ち寄って集まりを開くといった案も持ち上がったという。

液状化の被害を受けた千葉県浦安市の「エルシティ新浦安」(7棟、計124

8戸)でも、住民間の助け合いが生まれた。ボランティアチーム「生活をつなぐ会」を作り、車で高齢者を病院に送り迎えしたり、子どものために絵本の読み聞かせをしたり。断水が続いた2棟の家庭のために、自宅の浴室を開放する家庭も十数戸ほどあったという。

理事長の赤塚元さん(62)は「今回の震災で、住民の心の奥に隠れていた助け合いの意識が表面に表れたようだ」と話す。

1級建築士やマンション管理士らで作る任意団体

「震災直後、住民から集まったカセットコンロなどで、助け合いました」と話す大竹さん(奥)ら(仙台市の長町街苑パークマンションで、4月16日撮影)



「マンションコミュニティ研究会」(東京)の代表、広田信子さんも、住んでいる浦安市のマンションが被害を受けた。断水が続く中、高齢者や子育て中の母親のために、ほかの住民が給水車に並ぶなど、自然と助け合いが生まれた。広田さんは講演会で住民間のつなが

りの大切さを説いてきたが、自身もあいさつ以上に踏み込んだつきあいはできていないのが実情だった。だが、震災後の10日間で、これまでの10年間よりも近隣との絆が強まったと実感している。

「震災を体験したマンションでは、同じ苦勞を体験し、助け合ったことによって新しい仲間意識が芽生えている。これを大切に育ててほしい。被害を受けなかったマンションでも、住民同士のつながりの大切さは十分に想像できるはず。一人一人が何ができるか考えることで、人と人がつながるコミュニティを育てられると話す。(西内高志)

くらし 家庭

●現場からの報告 4

復興への道 ～つながる～

*別に参考資料があります。

東日本大震災による被害の状況（A3版）

東北まちづくりOMニュースレター

東北まちづくりOMメンバー・運営委員

（仙台市太白区役所建設部街並み形成課主査）

藪内 しずか

復興への道 ～つながる～

東北まちづくりオフサイトミーティング
<http://t-o-m.cafe.coocan.jp/>
 メンバー・運営委員
 数内 しずか
 (仙台市太白区役所建設部街並み形成課主査)

はじめに・・・

- この場に来るのが、本当に私で良かったのか？
- 震災以降、ずっと考えていたこと、「本当の意味で地震に強いまち」って何だろう？
- 自分は弱い人間だけれど、できることを見つけて、「小さな一歩」を大切にしたい！
- 「つながり」を感じて、日々を過ごせた！
- 感謝の気持ちで一杯！ありがとう。。。。

東日本大震災の前日は 「建設部・退職者に感謝する会」 だった・・・



3月11日(金)
 14:46 地震発生
 前日夜は、退職者に
 感謝する会だった
 (集合写真はみんな
 笑顔で写っている。こ
 の中のひとりが犠牲
 になった。)

そして、地震が来た・・・

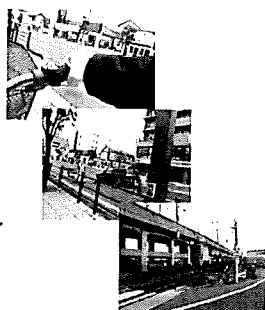
●頭をぐるぐるめぐる・・・

- 冷静に対処しよう！
- 落ち着け、自分！
- あ、記録しなきゃ！カメラが倒れかけた図面ケースの傍・・・取りにいけないかも？
- 近傍地パトロールしなきゃ・・・ メモも・・・

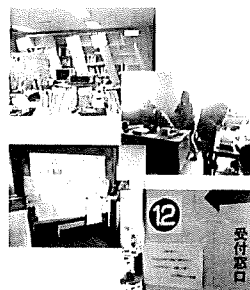


パソコンが使えない・・・

- 電気がない町は、前が見えない・・・知らなかった・・・
- 自転車で転ぶ、雪も積もる・・・死ぬと思った・・・
- 仲間に感謝・・・半減した人数でよくやったと思う



お互いに声を掛け合おう！



- 目の前のことを共にやるしかない！
- お互い声を掛け合おう
- 仲間の絆が生まれる
- まるで、ドラマか映画のようだった
- 情報は、その都度お知らせ！紙を貼りまくった

仙台市の被害状況－０１

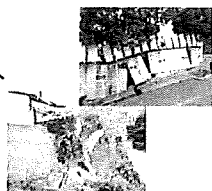
人的被害

(6月15日仙台市災害対策本部発表)

死者 704人

行方不明者 51人

重軽傷者 2273人



仙台市の被害状況－０２

建物被害

(6月15日仙台市災害対策本部発表)

全壊 13,179棟

大規模半壊 5,541棟

半壊 12,200棟

一部損壊 17,459棟



被災建築物応急危険度判定(3/12～5/10)

8,907件実施(危険1,543件(17.3%))

仙台市の被害状況－０３

・津波被害を受けた宮城野区・若林区を中心に、避難所15箇所ですべて1,033人が避難生活を強いられている。(平成23年6月10日現在)

・応急仮設住宅(平成23年6月15日現在)

プレハブ住宅:着工1,523戸 完成1,371戸

借上げ民間賃貸住宅

申込6,920戸 入居決定2,485戸

公務員住宅等 供給725戸 入居決定166戸

入居募集 第1次(4/11～18)

第2次(5/9～5/18) 随時(4/27～6/10)

被災建築物応急危険度判定の様子

太白区は、全て職員のみで実施(535棟)

崩れそうな建物の判定は、とても怖い...



我が課の対応状況

- ・地震当日は、人員が圧倒的に不足...さらに、その後病人が2人出た...当初5日間は大変
- ・地震の次の日から「被災建築物応急危険度判定」業務の開始(～5月6日まで) 計535件実施(職員だけで判定)
- ・震災対応業務(応援含む)及び通常業務
- ・日々変わる情報や市民ニーズへの対応
- ・耐震化PRへの模索(耐震診断・改修工事等事業の凍結)

震災後の被災者支援 職員の勤務状況－０１

- ・被災後3日間の睡眠時間は、合計5.5時間(初日30分,2日目2時間,3日目3時間)※自分
- ・震災から5日間...半減した人数での対応に疲労の色(課員すべて)
- ・震災から10日目...目の下にクマがある職員が急増
- ・日々変わる市民ニーズへの対応(相談内容、状況、他部署からの要望、縦割りの弊害、たらいまわしのような対応、情報共有不足)
- ・蓄積する疲労、興奮状態の継続、心的ストレス

震災後の被災者支援 職員の勤務状況－02

- ・ 10日目の約束事！みんな、週に1度の休みを取ろう！長丁場なのだから、協力し合ってやっていくことに・・・！
- ・ 被災者の対応状況は共有化！（情報共有コーナー、声を掛け合う・・・）
- ・ 地域の皆さまとの連携：町内会やマンション管理組合の皆さまからの情報提供に感謝！（自助、共助の素晴らしさを実感！）

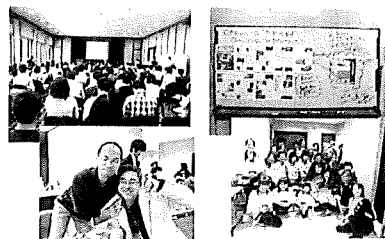
仙台市震災復興ビジョン ～仙台市震災復興計画素案～

- ・ 平成23年5月31日公表
- ・ 人と人とのつながりや支え合い、「絆」や「協働」の大切さが再認識された
- ・ ビジョンのコンセプト「新次元の防災・環境都市」
- ・ 地域・市民の防災力向上（復興ビジョンより抜粋）
 - 地域コミュニティ等による防災力の向上
 - 市民一人ひとりの防災力の向上
 - 住宅・マンション等の防災力の向上

東北まちづくりオフサイトミーティング （通称：東北OM）の活動－01

- ・ 東北6県に広がり、日本中にメンバーが存在する「ゆるやか」で「熱い」ネットワーク！
- ・ コンセプト「敷居は低く、されど志は高く！」
- ・ 平成21年6月に、山形県山形市後藤さんと宮城県栗原市の友情がきっかけで「発足」
- ・ 地域、年齢、性別、職種のカベを取り払って！
- ・ 「東北を元気にしたい！」と考えている全ての人すべてを対象に、ゆるやかな「つながり」の中で、課題や知識を共有化し、意識を高めあい、相互に成長していくことを目標にしている。

東北OM勉強会の様子 Connecting for the Future ～未来 に繋がる絆～



東北まちづくりオフサイトミーティング （通称：東北OM）の活動－02

●通常の活動

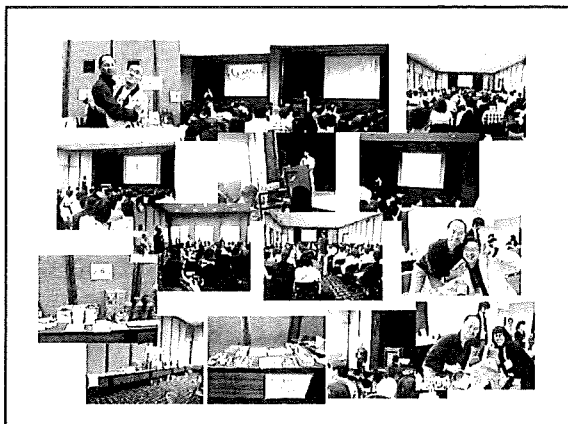
- ・ 定期的な勉強会や懇親会の実施
- ・ メールリストでの情報共有、意見交換
- ・ ニュースレターでの活動報告・紹介
- ・ ツイッターやフェイスブックの活用
- ・ メンバーは幅広い（行政職員のほか、民間企業や研究者、学生の人たちも参加している。）
※現在300名を越えるメンバーがいる。

東北まちづくりオフサイトミーティング （通称：東北OM）の活動－03

- ・ 4月23日（土）事前勉強会（仙台市役所内会議室にて開催）約40名の参加
- ・ 5月14日（土）第7回勉強会（仙台商工会議所内会議室にて開催）約160名の参加

『「絆」や「つながり」を紡ぎ、未来へつなげる』

「一人ひとりの一歩」が「未来（次）」へと繋がる「希望」になる・・・
そう信じることで、つながっている実感を得ることでこれからの
過ごしていける・・・はず！



絆が生まれる瞬間

- どんなことも・・・一歩踏み出すことで、次につながり、未来が見えてくる
- 今日の自分があるのは、何か「一歩」を踏み出したから・・・
- 勇気を持って踏み出そう・・・
- つながってみよう・・・
- ステキな「絆」が生まれる瞬間の「音」と「空気」を感じてみよう！
- わたしたちには「出来る」・・・。

さいごに・・・

- いま、私たちは、それぞれの想いをもち、前を向こうとしています。
- 「想う」ことは、次へ「つながる」はじめての一歩です・・・。
- どうか、ここにいる皆さんと、「想い」を共有することが出来ますように・・・
- 一期一会・・・またお会いできますように・・・

「つながり」をありがとう・・・

